令和３年度　成績概要書

課題コード（研究区分）：　4104-426500　（道受託研究）

１．研究課題名と成果の要点

１）研究成果名：令和３年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫

（研究課題名：令和３年度病害虫発生予察調査）

２）キーワード：病害虫発生予察、注意すべき病害虫、新発生病害虫

３）成果の要約：令和３年度に実施した病害虫発生予察調査から、多発傾向にあった病害虫として９病害虫を示した。また、令和４年度に特に注意を要する病害虫として４病害虫について防除指導上の注意を喚起する。さらに、令和３年度に新たに発生を認めた病害虫として 20 病害虫（病害 14、害虫６）を示した。

２．研究機関名

１）担当機関・部・グループ・担当者名：中央農試・病虫部・予察診断Ｇ・研究主幹・小松　勉

２）共同研究機関（協力機関）：中央農試・病虫部・病害虫Ｇ、上川農試・研究部・生産技術Ｇ、
道南農試・研究部・作物病虫Ｇ、十勝農試・研究部・生産技術Ｇ、
北見農試・研究部・生産技術Ｇ、
花･野菜技術センター・研究部・生産技術Ｇ
北海道農政部技術普及課、北海道農業研究センター、
北海道病害虫防除所、（全道農業改良普及センター）

３．研究期間：令和３年度　（2021 年度）

４．研究概要

１）研究の背景

病害虫の発生はその年の発生状況や気象経過のほかに、前年の発生状況の影響を受ける。効率的な病害虫防除を実施するためにはそれらを踏まえた全道的な情報が求められる。また、道内で未確認の病害虫が突発的に発生するため、迅速な対応が求められる。

２）研究の目的

全道での病害虫発生状況を新発生病害虫も含めて記録し、これをもとに次年度に注意すべき病害虫を示して防除指導にあたっての注意を喚起する。

５．研究内容

１）農作物有害動植物の発生状況

・ねらい：農作物有害動植物の発生状況を記録する

・試験項目等：18 作物･86 病害虫の発生状況を調査

２）突発および新発生病害虫の診断試験および調査

・ねらい：道内で新たに発生した病害虫を同定し記録する

・試験項目等：発生調査、再現試験、同定試験

６．研究成果

１）令和３年に多発～やや多発した病害虫

(1) 秋まき小麦：赤さび病
(2) 春まき小麦：ムギキモグリバエ
(3) ばれいしょ：そうか病
(4) ねぎ：ネギアザミウマ
(5) だいこん：キスジトビハムシ
(6) ブロッコリー：コナガ
(7) りんご：腐らん病、ハマキムシ類、ハダニ類

２）令和４年度に特に注意を要する病害虫

(1) 秋まき小麦の萎縮病

本病の発生地域は徐々に拡大する傾向にある。本病の症状は縞萎縮病と似た点が多く判別が難しいが、６月中旬まで黄化症状が認められるのが本病の特徴である。縞萎縮病と同様に連作や短期輪作を避けることと適期播種が重要である。発生地域あるいは発生ほ場を拡大させないために、早期発見に努め、他の土

壌病害と同様に作業機に付着した発生ほ場の土壌を他のほ場に移動させないことが重要である。

(2) 秋まき小麦の赤さび病

近年、赤さび病に対する抵抗性が”やや強”である主力品種の「きたほなみ」において発生が目立っており、抵抗性”弱”品種に準じた防除が必要な状況になっている。上位葉に発病が認められてからの防除では十分な効果が得られないため、発病が懸念されるほ場では、止葉抽出から穂ばらみ期、及び開花始（赤かび病との同時防除が可能）の合計２回の薬剤散布が必要である。

(3) 春まき小麦のムギキモグリバエ

令和３年は上川地方の春まき・秋まき小麦混在地域を主体に、ムギキモグリバエによる春まき小麦の被害が多発した。生育初期被害による異常分げつは、無効茎や遅れ穂を増加させ減収や品質低下をもたらすが、これらは本種の被害として認識されにくいため注意が必要である。防除対策として、早期播種とともに、春季高温年の成虫早発時には１回目の薬剤防除が遅れないよう努める。

(4) 野菜類の土壌病害

令和２から３年にかけて、うり類のホモプシス根腐病の発生地域の拡大が明らかとなり、さらにすいかの炭腐病、しょうがの根茎腐敗病及びかんしょの基腐病の発生が新たに確認された。健全種苗を用いること、発生ほ場では土壌消毒等の対策が必要である。

３）新たに発生を認めた病害虫

(1) 小麦の株腐病（病原の追加）
(2) 大豆の腐敗粒（新発生）
(3) らっかせいの大菌核病（新発生）
(4) かんしょの基腐病（新発生）
(5) にんじんのツメクサガ（新寄主）
(6) はくさいのマキバカスミカメ（新寄主）
(7) パセリのアルタナリア病（新称）
(8) トマトの輪紋病（病原の追加）
(9) ピーマンの斑点病（新発生）
(10) すいかの炭腐病（新発生）
(11) にんにくのモザイク病(病原の追加)
(12) にんにくのさび病(新発生)
(13) オクラのシロモンヤガ（新寄主）
(14) しょうがの青枯病（新発生）
(15) しょうがの根茎腐敗病（新発生）
(16) かじいちごのべと病（新称・国内新発生）
(17) すずばらのバラクキハバチ（新寄主）
(18) なしの炭疽病菌による葉枯れ症状（新症状・病原の追加）
(19) すぐりのスグリハバチ（新発生）
(20) すぐりのスグリヒゲナガハバチ（新称・国内新発生）

○新称：これまで正式な名称（病名、害虫の和名）のなかった新たな病害虫の名称提案。
○国内新発生：これまで国内での発生事例がなかった病害虫
○新発生：道内での発生事例がなかった病害、道内に分布が確認されていなかった害虫
○新寄主：道内に分布することが既知である害虫の、新たな作物への加害記録
○新症状：既知病原菌・病害における新たな症状
○病原の追加：既知病害と病徴に違いのない新たな病原の追加

７．成果の活用策

１）成果の活用面と留意点

ここに記載した病害虫について、特に今後の発生動向に注意する。また、令和４年度に特に注意を要する病害虫については適切な防除対策を講じる。

２）残された問題とその対応

８．研究成果の発表等

なし